

ハスキル人

高木彬光

角川文庫

td.

昭和五十二年十二月三十日 初版発行

定価は、カバーに
明記してあります

角川文庫

ハスキル人



著作者 高木彬光

発行者 角川春樹

印刷者 村沢達弘
東京都港区新橋四ノ三ノ八

発行所 株式会社 角川書店
東京都千代田区富士見二ノ十三
一〇二〇東京③一九五二〇八

電話東京五七二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan 旭印刷・多摩文庫
0193-133833-0946(0)

ハスキル人

高木彬光

角川文庫



空飛ぶ円筒

「木山昇平先生^{きやましやうへい}」

突然このようなお手紙を差し松本高校に職を奉じておりい。私は松本高校に職を奉じております教師でございますが、最た。それにつきましては、たしました。それにつきましては、私の乏しい科学的知識では何と理の権威でおられる先生のひ宇宙物理の権威でおられる先生のご教示を仰ぎたく存ずる次第で

別便の書留小包にてお送りい採集のため、本市付近の山私が植物採集のため、本市付近の山を徒歩中発見した品物でござのもの』と考えられるふし遊星よりのもの』と考えられるふしでございますので、特にご研究の分析によりますと、円筒の化学者の分析によりますと、円筒金属部は、アルミ三十六、チ金で、このような成分のもらなる合金で、このような成分のもは、地球上ではまだ製造され専門家でございませんからは冶金^{やきん}の専門家でございませんからの正否はよくわかりません。内部は一種の珪素樹脂^{けいそじゆし}からなり、これも未発見の物質だと申しすが、それもまた、私の専門外でございますから、先生のご研究におまかせいたします。

ただ、私は唯一の目撃者といたしまして、科学者の良心に照らして、偽らざる観測談を申し上げます。

この円筒を発見いたしましたのは、本月七日、日曜日のことでした。時間はちょうど正午ごろ、私が昼食をとろうとして林間に弁当をひろげたときでございます。

眼の前の空間を、この円筒は、ゆっくり降りてまいりました。落ちて来たという言葉はあたりません。ちょうど、眼に見えないパラシュートがこの上についておったような速度で、あるいはヘリコプターが降りてまいりますような速さで——秒速何メートルと、定量的な測定はできませんでしたが、とにかくこれは、無音のまま、無傷の状態で、私の眼前の空地に降り立ったのでございます。

私のそのときの驚きは——いや、これは科学者の観察の領域をはなれますから、ご想像におまかせいたしましょう。

最初は何かの新兵器ではないかと思ひました。防衛庁が秘密兵器の実験を行ない、それが偶然この地区に舞い落ちたのか、それともどこか外国の飛行機からでも発射されたものかと、私はそのとき大変狼狽ろうばいいたしました。つまりぬ心配をしたものだ、あとでは自嘲じちやういたしました。が、戦時中のあのいまわしい焼夷弾攻撃しょういだんこうげきのことをお考えいただければ、あるいはご同情願えるかもしれません。

私はあわてて現場を逃げ出しましたが、別に爆発する様子もないので、恐る恐る、その場へ引つ返しました。そのとき、この円筒は自然にふたを開き、中からすこぶる異様なものがあらわれたのでございます。

それは、ちょうどごぶし大の大きさでございました。色はほとんど無色に近く、かすかに虹の七彩を思わせる色調に輝いておりました。形はクラゲによく似ており、無数の触手が下部に密集しておりました。いかに生物学が専攻とは申しながら、私がこの奇妙な生物を見たときには、思わずあつと声を上げて逃げ出したのは当然でもございましょう。

百メートルほど駆け出して、私は初めてわれに帰りました。激しい好奇心をおさえられなくなって、もう一度その場へ引つ返しました。たとえば、どのようなものであっても、これをそのままに放置しておくのがいかにも残念だったからでございします。

ところが、この生物はどこかへ消えておりました。木の枝でふたをこじ開けてみましたが、中にははいっておりません。

私は大変後悔いたしました。その付近をくまなく捜しまわりましたが、もうそれは、どこにも見あたりませんでした。科学者として、前人未踏の功績を樹立する機会を逸したことは何より残念に存じますが、後日何かの役にたたぬかと思い、その円筒だけを持ち帰りましたが、その結果は前に申し述べたとおりでございします。

その後も第二の円筒が出現せぬかと存じまして、機会あるごとに付近を捜しまわっておりますが、残念ながら新しい円筒は発見するにいたりません。

以上をもって私のつたない説明を終わります。最後に先生のご健康を謹んでお祈り申し上げます。

十月二十日

本間健一郎拝

草々

この手紙に眼を通したとき、東大理学部宇宙物理学教室の助教授木山昇平は、何ともいえない興味と興奮に襲われた。

もちろん、本間健一郎なる人物には、彼は一面識もなかった。だが、手紙の文字と文面から察したところ、その人柄も真面目な科学者らしく、内容にも何の誇張もなさそうだった。彼は一日千秋の思いで、この円筒の到着を持ちわびていたのである。

現品が到着したのは、その翌々日のことだった。高さ五十センチ直径十センチの光沢をおびた円筒だったが、見たところ、人間の手で作ったものとの何の変わりもないように思われた。もちろん、中にその妙な生物がはいっているわけではないのだから、木山助教授の第一の仕事というの

は、それを化学科教室へまわして、分析してもらうしか手がなかったのである。

ところが、その結果がまだはっきりしないうちに、手紙の主の本間健一郎は、自分で教室にあらわれた。

名刺を見たとき、木山昇平はびっくりしたが、くわしい話を聞きたいと思っていたところだから、喜んで助教授室に案内すると、二人で相對したのである。

手紙からうけた印象と、目のあたりにするこの人物の印象とはぜんぜん違っていた。その眼には何ともいえない光があった。その声にも狂ったような響きがあった。

「あの円筒について何かおわかりになりましたか？」

初対面の挨拶が終わると、本間健一郎はまず単刀直入に切り出した。

「まだです。残念ながら、きょう現物が届いたばかりのものですから」

木山昇平が答えると、相手はぐっと身をのり出して、

「それはまことに残念ですが、私はやっと真相を発見しました。あれはハスキル星からの使者なのです」

「ハスキル星？」

「そうです。地球から測って、三・五六光年の距離にある一つの遊星です。その上には地球の人類より数千年ほど文明の発達した生物が住んでいます。その星からやって来たハスキル人の

あれが最初の使者なのです」

木山昇平ははっとした。相手は真面目な顔をして、こういう話を始めたのだ。精神のどこかに異常があるのに違いない。あの手紙もきつと、狂人の幻想の産物なのだろうと思うと、とたんに寒気がして来た。

気違いとなると、いつ乱暴を始めるかわからない。君子あやうきに近よらずで、できるだけ怒らせないようにして、早く帰ってもらおうと考えて、

「なるほど、それはまったくおもしろいお話です。学術的にも大変興味のあるお話ですが、あなたはだれから、そのことをお聞きになったのです」

「ハスキル人です。いや、いまでは私がハスキル人その者なのです」

「それはまあ、何と申し上げてよいやら」

「先生、私は手紙の中に、奇妙なクラゲのような生物をあの円筒の中で発見した——と書いておきましたでしょう。あれがハスキル人の頭脳だったのです。彼らは自分たちが、この地球にやってくるかわり、頭脳だけを、円筒の中に入れて飛ばしてよこしたのですね。その頭脳が、いつのまにか、私の頭の中に侵入した。だから、私がハスキル人その者だということになるのです」

「大変興味のあるお話ですが、僕はこれから講義がありますので……」

「先生は、私を気違いと思っておいでですね。無理もない。無理もないことですが、それでは

私の頭脳を試験してみてください。ハスキル人の能力が、どれほどすぐれているかお目にかけましょう。どんなむずかしい問題でも」

木山昇平は、何とも挨拶のしようがなくなっていた。まともな専門的な問題を聞いてみる気もなかった。ふと、^{かほん}鞆の中に将棋の雑誌がはいっていたことを思い出して、それを取り出し、六十九手詰という難解な詰将棋の問題を捜し出し、その図を相手の眼の前につきつけた。

「さあ、ハスキル先生、この詰将棋が詰みますか。これが一目^{めくら}睨んだだけで解けたら、僕もあなたの言葉を信用しますがねえ」

本間健一郎は、ほんの数秒、その図を睨んでにたりと笑った。

「さあ、解答をご覧なさい。一手たりとも違っていたら、私はこのまま失礼いたします」
彼はかすかに眼をとじて、

「三二金打、同玉、四一飛成……」

と手を読みだした。解答のページと照らしあわせて、木山昇平は愕然^{がくぜん}とした。詰将棋では日本最高の権威といわれる塚田^{つかだ}九段が解決に一時間かかったと注釈のついているこの難解な問題を、彼はカンニングでもしているように、すらすら解いていったのだ。

「驚きました、まったく……」

と木山昇平は頭を下げた。今度は少し真剣になって、学術雑誌をとり出すと、専門的な積分方

程式の問題をつきつけた。この解答も二分とかからなかった。それからいよいよ意地になって、最近電子計算機で計算したばかりの問題をつき出してみたが、最後の正確な数値があらわれるまでには、これも五分とかからなかった。

「ちょっと、ちょっと、この部屋でお待ちになってください。あらためて、ゆっくりお話をうかがいますから」

木山昇平は、あわてて部屋を飛び出した。とにかく学部長に相談して、この奇跡的人物をどうあつかうか、きめようと思ったのである。

ところが教室を出たとたん、彼はぼったり医学部の瀬尾博士にぶつかった。精神病理学にかけては、日本でも有数の大家だった。

「木山君、そんなにあわててどうしたんだ？」

「ああ、先生。いいところでお目にかかりました」

彼は口から泡をとばして、このハスキル人の異常な能力のことをまくしたてた。瀬尾博士は首をかしげて、彼の話を聞いていたが、

「どうもその話はおかしいぞ。その先生に、何か特殊な能力が備わっていることだけは認めざるをえないようだが……ひょっとしたら、それは読心術を用いているんじゃないだろうか？」

「読心術？」

「そうだ。むかし、フリーディニという大魔術師がいてね。もちろん、専門の魔術のほうでも歴史に残る大人物だが、そのほかにも読心術に長じていて、相手の心に浮かんだことは、何でもあててみせたそうだ。たとえば、いまの話でも、君はその解答を知っているわけだろう。それを自分でつきあわせて、相手の返事を聞いたんだろう。それがそのまま、むこうの頭に、びーんと映ったんじゃないかね」

「なるほど、そうとも思えますね」

「それにしても、なかなか興味のある対象だ。ハスキル星^{うんぬん}云々は別として、僕にも一つ、その人物の鑑定を、いや診察をさせてもらおう」

瀬尾博士も、とたんに学者としての興味をよびおこされたようだった。さっそく、木山昇平といっしょに、部屋へ引返したが、ドアを開けて眼を見はった。

「木山君、そのハスキル人はどこにいる？」

木山昇平も飛び上がった。本間健一郎は幻^{まぼろし}のように、部屋から消えてしまっていた。

便所へでも行ったのかと思って、あわてて教室中を捜しまわったが、その姿はどこにも見あたらなかった。

「木山君、精神鑑定をしなきゃいけないのは、ひょっとしたら、君のほうじゃないかねえ」
痛烈な皮肉をあびせかけられても、木山昇平は一言も答えることができなかった。

木山昇平は、その日一日、まるで狐きつねにでもつままれたように過ごした。

夜になって、銀座の喫茶店で、恋人の水谷恭子みずたにきょうこと会ったときにも、この奇妙なハスキル人のことが気になって、話もとんちんかんだった。

「ねえ、昇平さん、今晚はいったいどうなすったの？ いやよ、オリオン星座のスペクトル分析のことばかり考えていちゃあ」

木山昇平は苦笑いした。三十六のきょうまでずっと独身で通したくらいだから、いままでのその生涯しょうがいは、学問ただ一筋の半生だった。恭子に初めて出会うまでは、恋愛も結婚もぜんぜん眼中になかったくらいであった。

「いや、オリオン星座じゃなくって、ハスキル星だ」

「どっちにしたって同じことよ。せめて火星ぐらいなら大枚金二百円なり也を投資して十万坪ほど土地を分譲してもらってもいいけど、ハスキル星なんて三万年たったところで、行けるかどうかわからないわ」

「こっちから飛んで行けなくっても、むこうから飛んで来たんだからしかたがない。それも空飛ぶ円筒で」

「空飛ぶ円盤じゃないの？ そのハスキル人ってどんな格好をしているの？ 火星人みたいに

タコ入道のような格好？」

「何でもクラゲに似ているらしいんだが……ただそれはハスキル人の脳髓のうずいで、それがくっついた人間は、われわれと何の変わりもない」

恭子は大きいためいきをついた。昇平もすっかりあわてて、きょうの怪事件のことを話して聞かせたが、もちろんこれは、恭子に理解してもらおうと思っても、ぜんぜん無理な話だった。

「昇平さん、わたくしも瀬尾先生のお話に賛成するわ。あす神経科へ行つて精密診断をうけるのね。ハスキル人だなんて、この眼で見なければ、ぜんぜん信用できないわよ」

「私はこのとおり、ここにいます」

昇平は思わずとび上がった。後ろをふり返ったとたん、そこに立っている本間健一郎に気がついたのだ。

「ハスキル先生、どうしたんです？ どうしてここへ？ いや、さっきはどんなに捜したかわからないんですよ」

「ご心配をおかけしてすみません。いや、東京に滞在する費用が足りないと思ったので、その調達にとび歩いていたんです。きょうはとりあえず、競馬の馬券を買って来て、一万円ほどかせいで来ました。あと一週間もすれば、五百万円ほどはいるんですが、さしあたりの費用に困りますからね」

木山昇平は、頭をかきかき、二人を紹介したが、恭子は自分がかかわれていると思ったらしい、猛然として反撃に出た。

「あなたがハスキルさんなの？ どうして、わたくしたちがいま、ここにいるということがおわかりになったの？ 五百万円どうしておかせぎになるの？」

「私の頭には、どんなことでもわかるのです。お疑いなら百万円あなたがたの結婚費用にさしあげましょう。私には、あと四百万円残りますから、これで計画を実行するには十分です」

彼がテーブルの上にさし出したのは、何と一枚の宝くじだった。

恭子は軽侮の色をはっきり見せて、それをおしただいた。

「どうもありがとうございます。リベートをお返ししなくちゃいけないんでしょうけれど、それは、これがあたって賞金をもらってからにしていたたくわ」

「そんなものはどうでもいいけれど、なくさないようにしてください。どうもあなたのいまの調子だと、この店を出たとたんにやぶいてしまいそうだ」

「それは僕が預かっておく」

昇平はあわてて横から手を出して、その宝くじをひったくった。恭子はいよいよあきれたように唇を曲げて、

「あなたまで、このハスキルさんにかぶれたの？ ねえ、ハスキル先生、わたくしはこの人の

お仕込みで、合理主義者でございます。あなたがもしも、ほかの星からおいでなされたお使用でございますならば、どうかわたくしに奇跡をお見せくださいませ。たとえば、このコーヒーの中からダイヤモンドをお出しになってくださったら、わたくしはただいまから、ハスキル星の熱烈な信者となるでございましょう」

「ダイヤモンドを作るといふのは、何の造作もないことです。純粹な炭素の化合物を作ればいいのですから。ただ、装置を作るまでに、いくらか時間がかかりますから……そうですね、あと半年もしたら最初の製品ができあがるでしょうから、二百カラットぐらいのものをまずあなたにプレゼントいたしましょう」

「それまでに、半年どころか、一か月もしたら松沢に入院なすっているんじゃないやしません？ いや、十日もつかどうかわかりませんわ」

「恭子さん！」

昇平は、思わず声を大きくしたが、恭子は憤然として椅子いすをけって立ち上がった。

「氣違いの相手なんかもうご免だわ。お二人とも、あんまり話がばかげていて、こっちまで頭がどうかなってくるわ。ハスキルなんてとんでもない。そんな大でたらめな話を、だれが信用するもんですか！」

本間健一郎は、何ともいえない寂しそうな眼で恭子のほうを見つめた。